

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「アジア地理言語学研究」平成 29 年度第 2 回研究会

日時：平成 29 年 12 月 16 日（土）13:00-18:00, 12 月 17 日（日）10:00-17:30

場所：AA 研大会議室(303)

使用言語：英語

以下は各人による要約：

Satoko SHIRAI (ILCAA Joint Researcher, University of Tsukuba / JSPS)

“An overview of typological studies on ‘It rains’”

今回のテーマである ‘It rains’ が言語学的研究においてどのように扱われてきたかを概観した。その上で、特に、気象表現を類型論的観点から詳細に研究した Eriksen らの論文を再検討し、問題点の指摘を行った。結論として、先行研究を一部修正する形で、‘It rains’ を意味する表現を以下のように分類することを提案した。 [1] Argument type; [2] Argument-predicate type (さらに Cognate / Synonymic / Split の 3 つに下位分類); [3] Predicate type.

Ryo MATSUMOTO (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University of Foreign Studies), “‘It rains’ in Uralic and Tungusic”

「雨が降る」という意味を主に名詞で表すタイプ (A タイプ)、動詞で表すタイプ (B タイプ)、そしてその両方で表す C タイプ (動詞は省略できないことから B タイプの下位に位置付けた) に分けるとする。ウラル諸語においてはこの全てのタイプが見られるが、分布を見る限り、C タイプだったであろう形から、名詞、あるいは動詞のどちらか一方に分かれる形で変化したとの仮説を立てた。ツングース諸語においては、ほぼ全てで C タイプのみが観察され、天候を表す語は名詞でも動詞でも使えるという語彙範疇にあると言える。

Atsuko UTSUMI (Meisei University), “Expressions for ‘It Rains’ in Formosan and Malayo-Polynesian Languages”

台湾諸語(Formosan languages)とマラヨ・ポリネシア諸語における ‘It Rains’ の表現は大きく二つのタイプに分けられる。一つ目は「雨」を意味する名詞がそのまま動詞として使われる、「品詞の転換」のタイプである。この場合は動詞で使われている場合と名詞として用いられる場合で形態的には全く同一である。二つ目のタイプは名詞の「雨」に動詞接辞が付加するタイプである。一つ目のタイプはマレー語の各種方言やインドネシア諸語が当

てはまり、マレーシア半島とインドネシアのスマトラ島、ジャワ島、ヌサ・トゥンガラ諸島に分布する。二つ目のタイプは台湾とフィリピンタイプの諸語が分布する地域（インドネシアの北・中部スラウェシなど）に見受けられる。

Hidetoshi SHIRAISHI (ILCAA Joint Researcher, Sapporo Gakuin University), “‘It rains’ in Nivkh”

The geographic distribution of the two forms meaning ‘rain’ in Nivkh [lix] and [nix], differs from the cases reported in the current research project so far; it is not separated by the dialectal border between the two main dialects Amur and Sakhalin. Rather, [nix] is distributed in the southern half of the Sakhalin dialect area, in which the spoken dialects are regarded as subdialects of the Sakhalin dialect.

Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher, The Foundation for Research and Promotion of Ainu Culture), “‘It rains’ in Ainu”

アイヌ語で「雨が降る」は、基本的に「雨」という名詞と「ダミー動詞 (dummy verb)」(Mulchukov & Ogawa 2011; 2) を用いて表現し、方言形は大きく四つに分類される。タイプ A は名詞の「雨」に「立つ」という一項動詞を用いるタイプで、北海道に広く分布する。タイプ B は樺太に分布し、「雨」に「落ちる」という一項動詞、タイプ C は北海道の中央部に分布し、「雨」に「強い」という一項動詞を用いる。タイプ D の千島方言は、0 項動詞 *siriwin* という形でのみ報告され、北海道方言の「天気が悪い」にあたる語形と考えられる (< *sir-* は接頭辞「あたり/様子/大地」、*wen* は1項動詞「悪い」)。『蝦夷方言藻汐草』(1792) には、「雨」という見出しに「ベニ」や「ウエニ」という語形が報告され、北海道南部の八雲や長万部方言の *weni* との関連が考えられる。

Shinsuke KISHIE (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokushima), “‘It rains’ in Japanese”

日本語も世界の諸言語と同様、気象に関する表現はバラエティに富んでいる。「雨」や「雪」など、特に気象に関する語にはたいへん数が多い使い分けがあり、日本語の特徴として特筆できる。日本語では「雨が降る」といった場合、インド=ヨーロッパ諸言語のような非人称主語 (impersonal subject) を用いず、「雨が降る」” *Ame ga furu*” = *It rains.* といった形を用いる。日本語の語順は、SOV を基本としている。「雨が降る」の場合は、「降る」が自動詞であるため、雨 (主語) + 降る (動詞)、すなわち、SV の形となる。琉球諸方言を含め、日本語諸方言においてすべて同一であると言ってよい。

Fumiki SUZUKI (Nanzan University)

“‘It rains’ in Sinitic”

中国語方言における「雨が降る」は、動詞+名詞 (目的語) 構造をとる。主要な動詞は南方に分布する「落」と北方に分布する「下」で、長江を境界として南北対立を示す。

浙江から福建にかけては「盪」とその同源語が分布するが、その分布域は「倣」によって分断されている。名詞成分は、「雨」がほとんどであるが、広東・広西では「水」が分布する。また、山東省では、オノマトペに由来する「*dida*」が見られる。

Mika KONDO (ILCAA Joint Researcher)

“‘It rains’ in Austroasiatic”

本発表では、まずオーストロアジア語族の一例として、ベトナム語における天候表現について紹介した。ベトナム語の *mua* ‘雨’ という語は、名詞にも動詞にもなり得、この語を用いて「雨が降る」を表すには a) *trời* ‘sky, heaven (n)’ + weather verb/adjective、b) (Noun phrase for place or time +) weather verb、c) Weather noun + verb の3つの表現が可能である。

オーストロアジア語族における「雨」という語彙の分布を見てみると、その地理的分布からベトナム語の *mua* に繋がる A) CmVh type が最も広く分布しており、これが最も古い形式であることが推察される。一方、統語的特徴を見てみると、ベトナム語の a), b), c) の用法に加え、さらに d) to fall, to rain (v) + rain (n)、e) NP [rain (n) + to fall (v)] + to fall (v) と思しき語も散見されるが、詳細についてはさらなる調査が必要である。

Atsuko UTSUMI (Meisei University), “Accent in Austronesian Languages”

本発表ではオーストロネシア諸語のアクセントについておおまかな傾向を述べた。オーストロネシア諸語においては、母音の長短が音韻的であったと考えられている。次末音節が長母音を持っている場合は、その音節にアクセントが来る。そうでない場合は最終音節にアクセントが来ていたと考えられる。現在のオーストロネシア諸語においては、①長短の音韻的な区別があり、最後の長母音のアクセントがあるタイプ、②アクセントの位置が固定で最終音節、③アクセントの位置が固定で次末音節、④アクセントの位置が固定で前次末音節、⑤アクセントの位置が基本的に固定であるが /a/ がその位置に来たときはずれる、⑥アクセントの位置が音韻的、⑦音韻的な声調がある、という7つのタイプに分けられる。⑦はタイやベトナムなどに分布し、明らかに隣り合った言語の影響を受けている。①はほぼフィリピンに限られる。その他は台湾からフィリピン、インドネシアにかけて散発的に分布している。

Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University), “‘It rains’ in Tai-Kadai”

A タイプとして「雨」名詞・動詞が同型で単独で使われるものが海南島の黎語やベトナムなどのゴーラオ語で見られ、一番古いものと推定した。B タイプとしては "sky" + V 型があり、やはり黎語の併用文型として現れる。C タイプとしては "sky" + N + V 型があり、「雨」は名詞となり、「落ちる」という動詞が付く。E タイプの N + V 型もこれと

同じ語順であり、西南タイ語に見られる。それに対して、Dタイプの"sky" + V + N型やFタイプのV + N型は主として中国領内に見られ、中国語で「下雨・落雨」と表現する文型の影響下にあって形成されたものと推定した。

Satoko SHIRAI (ILCAA Joint Researcher, University of Tsukuba / JSPS), “‘It rains’ in Tibeto-Burman”

チベット＝ビルマ語派の「雨が降る」を意味する表現が、共時的観点からは、以下のように分類できることを示した。[A] argument type, [B] predicate type, [C] argument-predicate type. さらに、[C] は、[C-i] cognate type, [C-ii] synonymic type, [C-iii] split type に下位分類できる。これらのタイプの地理的分布を分析すると、[A] は主に西部に、[B] と [C-i] は東部に、[C-ii] は南部に、[C-iii] は北部に多く見られる。これに加えて、中央部ではすべてのタイプが観察される。以上のことから、南部と東部では述部が、北部と西部では名詞項が、降雨表現の核を担う傾向があることが明らかになった。

Yoichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies), “‘It rains’ in Arabic”

アラビア語圏の中核地域（アラビア半島、シリア・イラク、エジプト、マダガスカル地方）では、動詞が表現の中心であり、主語なしで動詞のみで言うのがごく一般的である。例えば *bitmaṭṭar* (エジプト) や *btifti* (パレスチナ) など。ただし、ダミー主語として *id-dunja* (世の中) が現れる場合も多い。一方、周縁地域では主語名詞「雨」が表現の中心になる。例えば *alxariṭf názal* [雨・下りた] (ナイジェリア)、*sobou almé* [注ぐ・雨] (ケニアのヌビ) など。また動詞もダミーとなっているものもある。*ʔed taamel if-ḥita* [進行・する・雨] (マルタ)。初期のアラビア語では動詞中心であったものが、周縁地域では他言語話者による習得の過程などによって主語中心の表現が一般化した可能性がある。

Hiroyuki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher, National Museum of Ethnology), “Findings from 100 maps of the Swadesh wordlist of Yunnan Tibetan”

この発表では、共同研究のモノグラフとして出版準備を行っている *100 Linguistic Maps of the Swadesh Wordlist of Tibetic Languages from Yunnan* の構成と方法、地図作成の状況、100語の語形の分岐などについて報告を行った。100語といえども、雲南チベット語では平均2語幹以上の形態をもち、分布も比較的複雑な様相を示すことを述べた。